

県営かんがい排水事業

関連遺跡発掘調査報告書II—3

—長浜市大辰己遺跡—

1985

滋賀県教育委員会

滋賀県文化財保護協会

県営かんがい排水事業

関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ—3

—長浜市大辰己遺跡—

1985

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

序

滋賀県下の、県営灌漑排水事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、ほ場整備事業の拡大に伴ない、その件数も年々増加し、本年度は8遺跡が対象となりました。

今回は上記の遺跡のうち整理の完了しました7遺跡を4分冊に分けて刊行するものです。

ここに、この報告書により、広く埋蔵文化財に関する理解と文化財愛護普及の一助にしたいと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解をいただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、深く感謝申し上げますとともに、この報告書の刊行にご協力をいただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和60年3月

滋賀県教育委員会事務局

文化部文化財保護課長

市 原 浩

例 言

1. 本報告書は、湖北地方における昭和59年度県営かんがい排水事業に伴う、長浜市大辰己遺跡および鴨田遺跡の発掘調査の成果である。

なお鴨田地区においては、遺構・遺物が認められなかったため、報告は大辰己遺跡として行う。また、一部長浜市教育委員会に調査協力を頂いた南端から延長100m分については、別途報告の予定である。

2. 調査は、滋賀県耕地建設課の依頼により滋賀県教育委員会の指導のもとに財団法人滋賀県文化財保護協会（理事長南 光雄）が実施したものである。
3. 調査にあたり、荻野勉・荻野良博・田辺宏明・小森靖子・西沢良子の各氏の御尽力を得、地元大辰己・永久寺の方々、長浜市教育委員会のお世話になった。ここに記して謝意を表する。
4. 現地調査・整理及び報告は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師用田政晴、財団法人滋賀県文化財保護協会技師奈良俊哉・吉田秀則が担当した。文責は以下の通りである。

第1章 吉田、第2章 吉田、第3章 用田・吉田・奈良、第4章 用田

目 次

1	はじめに	1
2	位置と環境	1
3	調査の経過と結果	
	(1)I区	1
	(2)II区	8
	(3)III区	8
	(4)昭和58年度調査区(常楽寺遺跡)	13
4	近江における弥生時代後期後葉の土器群—その再検討—	
	(1)問題の所在	23
	(2)近江の弥生時代後期後葉の土器	23
	(3)近江での土器の地域性	25

図版目次

- 図版一 I区T2, II区T6
図版二 III区T1-B, III区T3
図版三 常楽寺遺跡(南から), 常楽寺遺跡南半(北から)
図版四 常楽寺遺跡東壁基本層序, 常楽寺遺跡南端落ち込み
図版五 I区T1土器出土状況, I区T2土器出土状況, III区T1-B土器出土状況, III区T2土器出土状況, III区T3土器出土状況, I区T1調査風景

挿図目次

- 第1図 大辰己遺跡周辺遺跡分布図 2
第2図 大辰己遺跡トレンチ配置図 3
第3図 大辰己遺跡各トレンチ土層断面図・柱状図 4
第4図 I区第3層出土土器(1) 5
第5図 I区第3層出土土器(2) 7
第6図 I区T1・T2, III区T1-B出土土器 9
第7図 III区T2第4層出土土器(1) 11
第8図 III区T2第4層(2), 第5層出土土器 12
第9図 III区T2出土土器, 常楽寺遺跡上層出土土器 14
第10図 常楽寺遺跡下層出土土器(1) 16
第11図 常楽寺遺跡下層出土土器(2) 18
第12図 常楽寺遺跡中層出土土器 20
第13図 常楽寺遺跡中層・下層出土土器 21
第14図 常楽寺遺跡上層出土土器 22
第15図 近江における弥生後期後葉を中心とした土器群 29

1. はじめに

鴨田・大辰己遺跡は、近接する永久寺遺跡と共に以前より弥生～古墳時代にかけての遺跡として知られるが、遺跡の性格やその範囲等不鮮明な点も多い。

今回、鴨田・大辰己地区において県営かんがい排水事業が計画され、事前に発掘調査を行ないその点を補充し、保存資料を確保することになった。

なお報告は昨年度調査分の常楽寺遺跡についても付章として行なった。(吉田)

2. 位置と環境

大辰己遺跡は長浜市大辰己町に所在する。長浜平野のほぼ中央部に位置し、多くが田畑として利用され、標高約94mをはかる。今回の大辰己集落の東部から南部にいたる部分であるが、当遺跡は先にも述べたように古くから弥生～古墳時代の遺物の出土が知られている。集落の東の長浜南中学校建設工事に際し、弥生時代中期初頭に位置づけられる流水文を施す土器をはじめ、中期後半～後期にわたる幅広の口縁部をもち、ハケで仕上げられた甕Bを主体として近江色・畿内色(甕A)、さらには東海地方の影響をも示す土器が出土しており、長浜平野一帯の弥生時代の土器様相を解明していく上で貴重な資料とされている。(吉田)

3. 調査の経過と結果

(1) I区

昭和59年度の調査は、昭和58年度に常楽寺遺跡として調査した大辰己集落西端の南北76mを計るトレンチの南端にほぼつながる位置から開始した(第2図)。

上記の場所から西へ重機による耕土除去を行いながら遺構・遺物の確認を行ったところ、T1と称した18×2.5mのトレンチ東端第3層暗茶褐色有機質土が遺物包含層であることが判明した。そこでT1の西隣にT2として63×2mのトレンチを設定したところ、ここでも耕土・床土を除去した第3層にスクモが見られたが、その層位は約20cmと薄く、遺物も皆無で、その下層は厚い暗灰色粘土の堆積になった。

T1は約30cmの耕土と約10cmの床土の下に暗茶褐色のスクモが約50cmの厚さで堆積し、西からトレンチ東端に向ってゆるく落ちこむような形で弥生時代後期を中心とする土器群が検出された。湧水が激しい場所でもあり、出土状況と前年度の調査所見を合わせると、T1東端付近を中心とする南北方向の幅10m程度を計り、深さ数10cmの溝状遺構が想定された。そのベースは厚い青灰土色砂層で無遺物層であった。(用田)



- | | | | |
|---------|----------|-----------------------|------------------|
| 1 大辰己遺跡 | 10 鴨田遺跡 | 19 熊ヶ丘遺跡 | 28 舟崎山古墳 (明治26年) |
| 2 山階遺跡 | 11 永久寺遺跡 | 20 森ノ木古墳 | 29 歡喜光寺遺跡 |
| 3 川崎遺跡 | 12 大東遺跡 | 21 小幡古墳 | 30 塚町遺跡 |
| 4 上磯塚遺跡 | 13 七条東古墳 | 22 名越A遺跡 | 31 宇賀野塚町遺跡 |
| 5 宮可東遺跡 | 14 上畑付遺跡 | 23 金剛寺遺跡 | 32 人塚山古墳 |
| 6 宮可遺跡 | 15 狐塚古墳群 | 24 田村古墳 | 33 土川河口遺跡 |
| 7 三の宮古墳 | 16 塚古墳 | 25 奥松戸、法勝寺
狐塚、高溝遺跡 | |
| 8 柳町遺跡 | 17 馬塚古墳 | 26 金剛寺遺跡 | |
| 9 四ツ塚遺跡 | 18 赤塚古墳 | 27 布施遺跡 | |

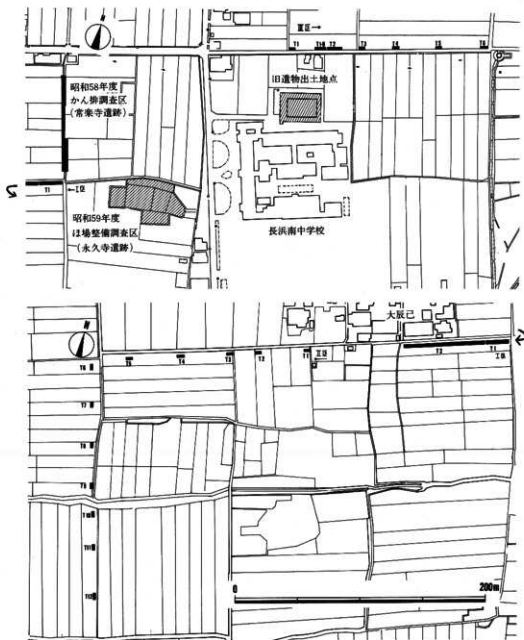
第1図 大辰己遺跡周辺遺跡分布図

(T1第3層)

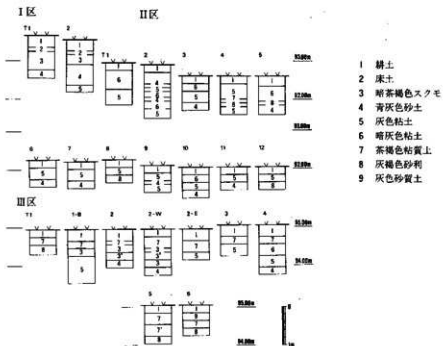
T1第3層出土の土器で図示可能な土器は、壺・甕・高杯・器台・鉢などがある。

壺(第4図1)は、受口状の口縁を呈し、口縁部外面及び肩部外面に波状文、櫛描直線文を施すが、磨滅が著しく内外面の調整は不明である。2~6は、長頸壺の類で頸部の長さ及び外反の度合いには若干の差異があり、時間幅を示すものと思われる。

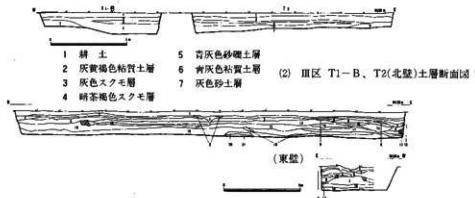
2は肩部外面にヘラ状工具による記号文が施される。6は完形品である。



第2図 大辰己遺跡トレンチ配置図



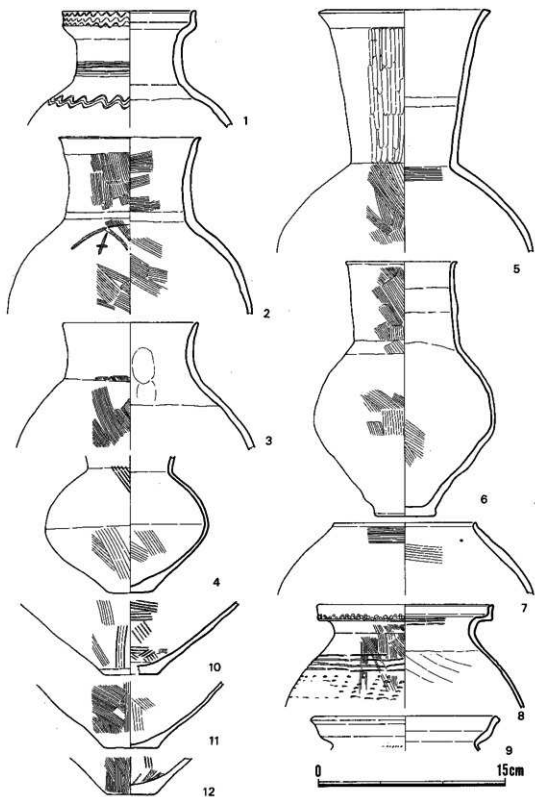
(1) 各トレンチ土層断面図



(3) 昭和58年度 かん配調査区(南半部)土層断面図

- | | | |
|------------|-------------------|--------------------|
| 1 表土 | 8 暗褐色スクモ層 | 15 灰褐色砂質土層 |
| 2 黄褐色粘質土層 | 9 茶褐色スクモ層 | 16 茶褐色砂質土層(スクモ混じる) |
| 3 灰褐色粘質土層 | 10 暗茶褐色スクモ層(砂混じる) | 17 灰色粘質土層 |
| 4 淡茶褐色粘質土層 | 11 灰褐色砂層(レキ混じる) | 18 灰褐色スクモ層 |
| 5 暗茶褐色スクモ層 | 12 淡茶褐色スクモ層 | 19 灰色砂層 |
| 6 淡灰褐色粘質土層 | 13 茶褐色粘質土層 | 20 淡褐色砂質土層 |
| 7 灰褐色砂層 | 14 黄灰褐色砂質土層 | 21 青灰色微砂層 |

第3図 大辰己遺跡各トレンチ土層断面図・柱状図



第4图 I区第3层出土土器(1)

7は無頸壺で口縁部に内傾面をもっておわり、体部は下位に張りをもつものがつくと思われる。

壺は、いわゆる近江型「受口状口縁」をもつものが中心である。第4図8はその典型的なもので頸内面にハケを残すが、口縁部及び肩部外面の施文は非常に雑である。9は口縁部の屈曲があまく、外方へ延びた形態を呈し、施文は認められず、8にくらべれば後出的である。第5図2は同様に受口状を呈する口縁をもつが、頸部が長く、端部のみを立ち上がらせたものであり、第4図8の形態から派生したものか、あるいは地域色（湖北地方）として扱われているものであろうか。

第5図12は体部のみであるが、外面全体にスガが付着する。

高杯においては、杯部口縁が非常に発達したもの（第5図4）と杯部が深く口縁部内面を肥厚させて沈線⁽²⁾を施す欠山式の影響を受けているもの(3)とがみられる。なお、5の脚部片は内弯気味に開いており、4のタイプにつながるものと思われる。

10・11は、受部が直線的に開き、脚部との境に明瞭な稜を示す器台であるが、先に述べた高杯同様東海地方の影響のもとに成立したものと考えられる。内外面はハケをナデによって消している。

愛知県一宮市尾張病院山中遺跡・蕪池遺跡⁽³⁾・西春日井郡朝日遺跡⁽⁴⁾に類例を求めることができる。

第6図1・2は、畿内の弥生時代後期に普遍的に存在する逆八の字状に開く鉢で内外面をハケで仕上げ、底部は穿孔される。

(T1第4層)

第4層から出土の土器で器種の明確なのは第5図1の壺のみであった。口縁部はくの字状に開き、端部外面にあまい凹面をなし、体部下位が若干張りをもつ。内外面はハケで調整するが内面及び外面下半は後でナデ消す。全体が淡灰褐色を呈する完形品である。

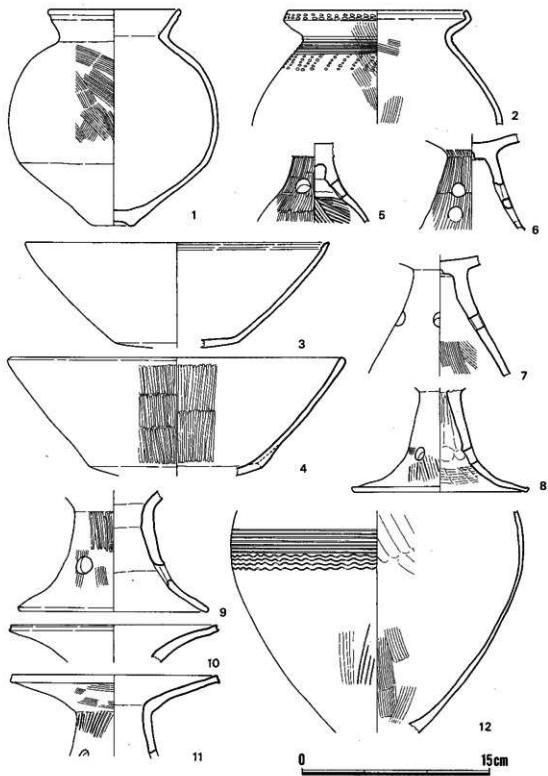
(T2第3層)

第6図3は畿内の弥生時代後期初頭にみられるくの字状口縁壺で端部がやや拡張気味に面をもっておわる。体部内外面はハケで仕上げる。

(T2第4層)

小型壺4は手づくねの完形品でくの字状口縁を呈する。体部外面はハケ調整で底部をしっかりと形づくる。5の器台は畿内の弥生時代後期前半に位置づけられる。

(吉田)



第5图 I区第3层出土土器(2)

(2) II区

I区T2の西端より西へ約75m付近の畑からII区と称して順次4×2m程度の試掘トレンチをT12まで設定し、遺跡の範囲確認を行った(第2図)。

T1からT6まで西方向へ比高差にして約70cm程度傾斜し、T6からT12までについては南方向へ田面のレベルは約15cm程度下っていく。

20～30cmの耕土下には、基本的に灰色に近い粘土ないし砂利層が広がり、その下は砂と粘土が互層となって厚く堆積する。ここでは遺物・遺構は検出されなかった。ただT12については、耕土下第2層に20cm程度の灰褐色粘質土が広がり、遺物は皆無であったが、それより南方向に遺跡の存在を想定させるような安定した土層があった。そのことはT12の南30m付近より南の延長約100mの長浜市教育委員会調査担当地区における調査結果に符号する。この調査結果については、鴨田遺跡として同じ区内の団体営ほ場整備に伴う事前調査の報告中に含まれる予定である。(用田)

(3) III区

III区と称したのは長浜南中学北側の農道沿いにあたり、かつて南中のプール建設の際、大量の遺物が出土したという地点(第2図)のすぐ北にあたる。農道下には従来の導水管が埋設されているため、農道に沿う形で北側の田面にトレンチを西から順次T1～T6として設けていった。

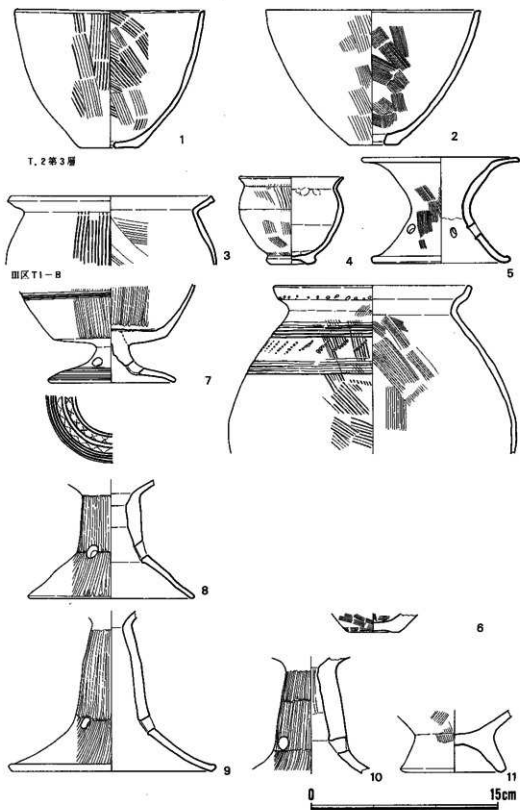
T1では、約20cmの耕土下に茶褐色土が堆積し、その下は灰色砂礫土であった。T3～T6でも基本的にはほぼ同様で、20～30cmの耕土下に20～30cmの粘質土が広がり、その下層に粘土と砂ないし砂礫土が見られる(第3図)。いずれも無遺物層である。

T2は約20cmの耕土下に灰黄褐色粘質土が床土状に広がる。その下層は灰色スクモ(第3層)と暗茶褐色スクモ(第4図)が溝状の落ちこみの埋土として堆積し、弥生時代後期の土器群を包含している。そのベースは無遺物の灰色砂土層からなる(第3図)。

T2は西側に遺物包含層が広がるため、電柱部分をはさんで西側にT1-Bとしてトレンチを新たに設定した。ここで溝状の落ち込みの肩が判明し、およそ東西幅20m、深さ0.8mの規模をもつものと考えられた。

またT2東端の第6層とした青灰色粘質土は落ち込みの一方の肩となり、この土層上面の落ち込み斜面部分にも一群の土器が検出され、埋土に含まれる土器群よりも古い時期のものであった。

T2及びT1-Bで判明した溝状遺構は、南北方向に在り、およそこのトレンチの南約30mが長浜南中プールの遺物出土地点にあたる。(用田)



第6圖 I区T1·T2, III区T1-B出土土器

(T1-B, 溝状落ち込み)

溝状遺構の第4層からの出土土器は、甕・高杯・器台等が認められた。

第6図6は屈曲のあまい受口状の口縁をもち、体部下半を欠くが倒卵形をなすと思われる甕である。口縁部外面及び肩部外面に櫛状直線文・刺突列点文が施され、体部内外面はハケ調整である。

7の高杯は杯部が深く、脚部は扁平で内外面丁寧なヘラミガキで調整する。口縁部外面に3条以上の沈線、脚部外面に沈線・刺突列点文等の施文がみられる。T2第4層からも同タイプの高杯が出土している。県内では長浜市越前塚遺跡⁽⁵⁾・鴨田遺跡⁽⁶⁾・高田遺跡⁽⁷⁾で類例が認められる。

11は八の字状に開く脚台で甕底部に接続するものである。

(T2第4層)

第4層からは、広口壺・長頸壺・無頸壺・甕・高杯・器台・鉢が出土している。

広口壺は、口縁部が大きく外反し、端部の拡張するもの(第7図1)、受口状の口縁を有するもの(2)、あまり肩の張らない体部に外上方へまっすぐのびる口縁をもつもの(3)がある。

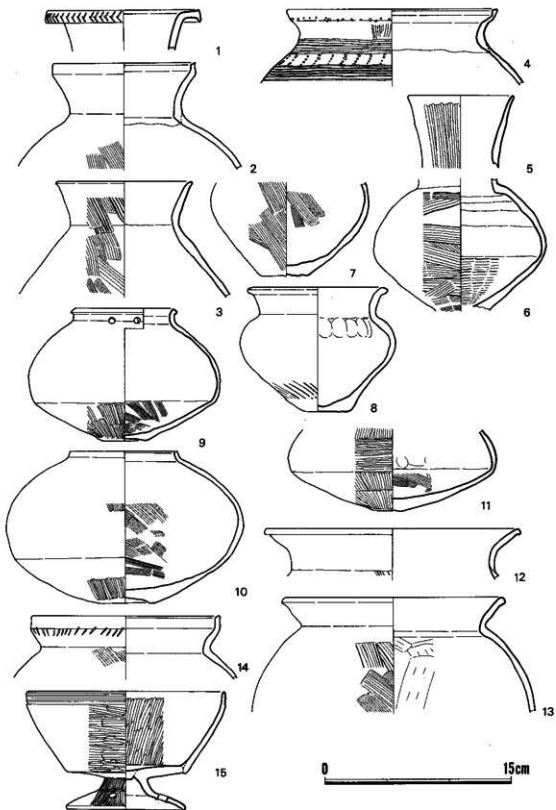
無頸壺は(9)のように口縁部が短くそり返り端部に面をもたせて2個1対の穿孔を2方向にもつものと単に口縁部が短くのびて端部に内傾面をもっておわる(10)とがある。両者とも体部下位が張り気味でこの部分が成形時の接合面にあたる。

甕はやや外反気味に延びて端部に面をもっておわるくの字状口縁の12・13と受口状の口縁を呈する(4・14・第9図2)がある。12・13はほぼ球形に近い体部をなすと思われる。第9図2は「受口状口縁」甕の典型的なもので口縁部の立ち上がりははっきりしている。外面はハケ、内面はヘラケズリで仕上げ器壁はは薄く、体部中位の張りが強い。なお14は日本海系の影響をうけて成立した甕であろうか。

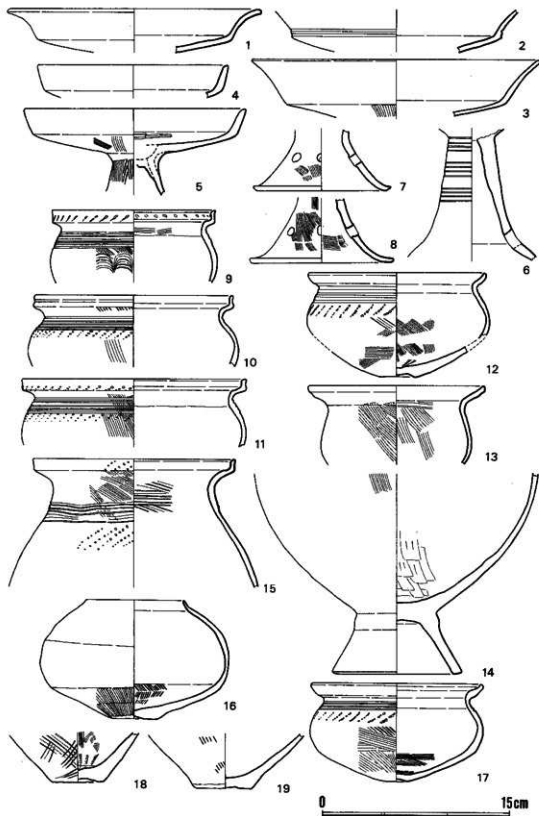
高杯では先に述べたT1-B出土のものと同タイプの15がある。脚部外面の施文は認められない。

第8図1～3は直線的に開く受部に大きく外反する口縁部の付くいいわゆる後期前半の高杯である。なお、2のみは受部屈曲部に2条の沈線を施す。

4・5は受部がまっすぐのび口縁部が短く立ち上がるもので、内外面調整はハケ、ナデによる。一般にヘラミガキ調整を主とする高杯にくらべ、つくりが雑であり、県内での類例は皆無である。県外では奈良県六条山遺跡S地区方形特殊土壇出土例(A類)⁽⁸⁾、石川県金沢市西念・南新保遺跡G区P-120土壇出土例⁽⁹⁾がみられるにすぎない。これらによれば筒状に近い脚部をもつと考えられる。脚部片の6は外面に櫛描による



第7图 III区T2第4层出土土器(1)



第8图 III区T2第4层(2), 第5层出土土器

直線文が施される。

鉢は「受口状口縁」甕に共通する形態を示し、外面の施文も認められる(9~12)。全体に口縁部の立ち上がりはまっすぐであるが、12は外方へのびる。

14は台付甕の底部であるが、外面はハケ及びびナデ調整、内面はヘラケズリ調整であり、体部上半及び内面下位に炭化物の付着が認められる。淡褐色を呈し、胎土も精良で他のものにくらべ異質であり、搬入品の可能性もある。

(T2第6層)

第6層から出土土器は壺・甕・ワイングラス形高杯・鉢があるが、第3~4層の土器群よりも古い時期のものが含まれている。

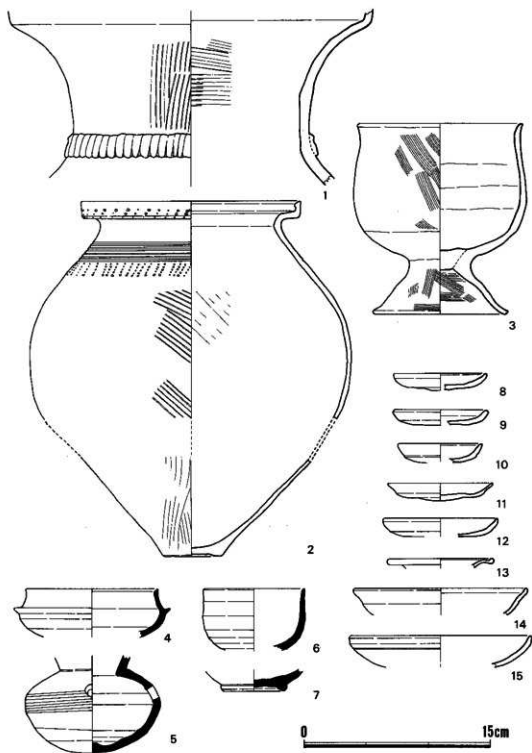
弥生第Ⅲ-Ⅳ様式併行期に位置づけられる壺(第9図1)、「受口状口縁」甕(第8図15)がそれにあたる。前者は口縁端部を欠くが、受口風に立ち上がり頸部に刻目文をもつ突帯がめぐり、内外面をハケ調整するもので一般に方形周溝墓等から出土例が多いものである。後者は肩の張りがなく口縁部がまっすぐ立ち上がり、頸部内面に明瞭なハケが残る。当遺跡出土の「受口状口縁」甕のなかでは時間的に先行するものである。

椀状の杯部にハの字状に開く脚部をもつ高杯(第9図3)は、東海地方との接触を示す資料である。愛知県一宮市蕪池遺跡、苗代遺跡第Ⅱ地点、尾張病院山中遺跡にて弥生後期の出土例として確認されている。当遺跡のものはこれらにくらべ脚部の開きが扁平である。また、県内での出土例は近江町奥松戸遺跡(未報告)等がある。

(4) 昭和58年度調査区(常楽寺遺跡)

昭和58年11月に実施したかんがい排水事業に伴う調査は、大辰己集落の西端の南北に75.4mを計るトレンチにおいて行った。この地区の南東に常楽寺という小字名が残っているため、寺跡の存在が想定され、常楽寺遺跡として事前調査を行ったが、トレンチの南半部分において弥生時代後期を中心とする遺物包含層が検出され、著名な大辰己遺跡に含まれることが判った。

調査は北から重機による耕土除去をもって開始したが、北半部分は灰色砂土が広がり、その下層は粘土が堆積し遺物は認められなかった。しかしながら北端から51m付近より南は耕土と床土下に暗茶褐色のスクモがあり、これに点々と弥生土器と須恵器が混入していた。従ってこの部分を中心に人力による掘り下げを行い、精査することにした(第2図)。ここでは南端から4mピッチでa~e区を設定した。層位は第3図-3)に示すとおり、各層位はほぼ水平に堆積し、基本的に耕土・床土の下は暗茶褐色



第9图 III区T2出土土器, 常乐寺遗址上层出土土器

スクモおよび灰褐色砂質土（上層）、灰色砂質土（スクモ混）（中層）、砂層（下層）となり、田面より約-1.8mで無遺物層となる。

これらの遺物包含層各区ごとに上層（第3図第5～第12層）・中層（第13～第17層）・下層（第18～第21層）と分け、遺物の取り上げを行ったが、北に行くに従い遺物量は少く、D・E区ではごく少量ではあった。南端から5.3m付近は南に向かって深さ1mほどの落ち込みが見られ、砂およびスクモを中心とした埋土中上面から須恵器片、埋土中ほどから土師器と弥生土器が大量に出土した。この落ち込みは(1)項で述べたI区T1のものに対応するものである。（用田）

今回の調査では縄文土器・弥生土器・須恵器・灰釉陶器等各時期の土器が出土している。いずれも包含層中より検出されたもので上～下層の各層位ごとにその特徴について述べることにする。なお、完形品としての出土例は少なく、全体のプロポーシオンを知ることは難しいため、主に口縁部の形態・特徴についてふれる。（吉田）

縄文土器（最下層上面）

縄文土器は中期後半のものと思われるものが5点、晩期のものと思われるものが1点ある。

中期の土器には、凹線で文様を構成するもの、沈線で文様を構成するもの、キザミ文様を構成するものというグループに分けられる。なかでもキザミによる文様は綾杉文状のものであり特徴的である。

晩期の土器は、口縁部の破片で、端部直下に突帯を有し、D字形のキザミが施してある。突帯の位置から船橋式ではなかいかと思われる。（奈良）

弥生土器

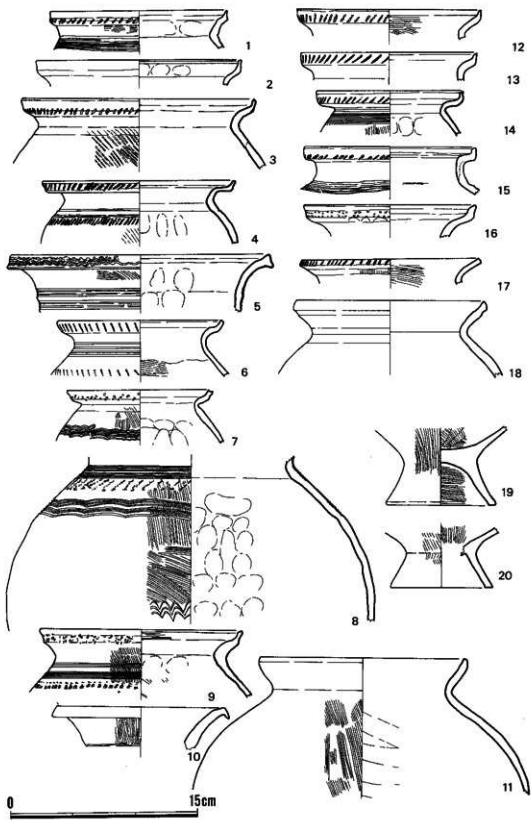
（下層）第10・11図

下層からは広口壺、甕、高杯、器台、鉢が出土している。

壺類は第10図5・10・11・17・18がある。口縁部が大きく外反する広口壺5は口縁部及び頸部外面に櫛状工具による波状文、直線文を施す。11・18はやや内弯気味に開くくの字状口縁をもつ。

第10図1～4、6～9、12～16の甕は広い意味での受口状口縁を呈するもので、口縁部がしっかりとした屈曲部をもつもの（2・6・7・14・15）と頸部が比較的長く口縁部が短く立ち上がるもの（1・3・4・8・9・12・13・16）とに大きく分けることができる。2のみ無文であるが、他はすべて口縁部・肩部外面に刺突列点文・直線文・波状文等が施される。なお、19・20は台付甕の底部である。

くの字状口縁部を有する甕は第11図1～3がある。2はやや外反気味にのび、3は



第10図 常楽寺遺跡下層出土土器(1)

まっすぐ上方へのびるが、3の形態の口縁部に球形の体部をもつ台付甕が大辰己遺跡・鴨田遺跡で出土している。

4の鉢は「受口状口縁」甕に共通する特徴を備える。

高杯5～7は杯部口縁が大きく外反して開くタイプであり、7の外面には波状文が施される。15・16は破片であるが杯部の深いいわゆる欠山系に属するものであろう。口縁部内面に肥厚帯を設け凹線文・列点文で飾る。県内では湖北・湖西北部地方にて出土例がふえているようである。

器台では全体が大きくx字状に開くもの(13)と受部と脚部との間に明瞭な稜の形成されるもの(11・12・14)とがある。後者は東海地方の影響を受けているものとみられる。

(下層) 第12・13図

中層出土の壺類は受口状の口縁を有するもの(第12図1)、口縁部が大きく外反して端部が内外に肥厚する広口壺(2～4)、長頸壺(5)、細頸壺(12・13)等がある。2～4の広口壺は端部に面をもって凹線を施し、3では頸部外面に突帯がつく。細頸壺の12は口縁部が上方へまっすぐのび、端部に外傾面をもって13のような球形の体部につながるものと思われる。

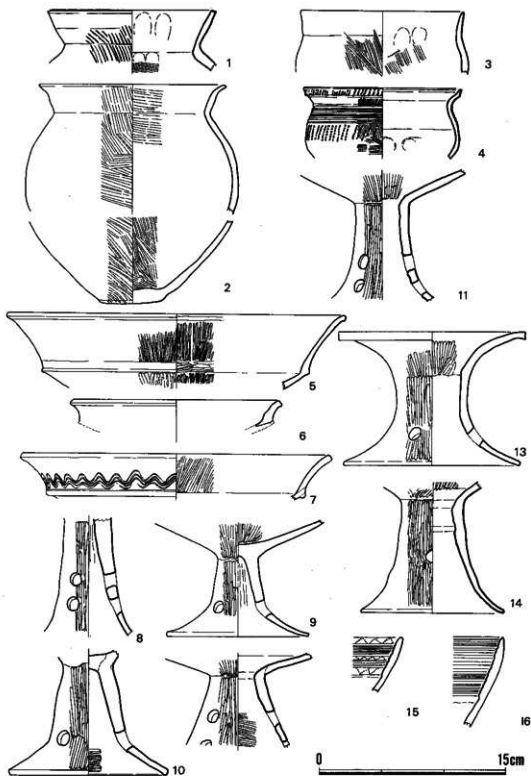
壺類は15のように受口状口縁(頸部が長く口縁端部が短く立ち上がる形態)を有し口縁部及び肩部外面に刻目文・直線文を施されたものが主である。(7～8)。

高杯は杯部口縁の外反するもの(第13図)、杯部の深いもの(第12図16・17、第13図2・10)、杯部が碗形のもの(3)がある。第12図16は東海地方の欠山式の特徴を備え、口縁端部内面を肥厚させて凹線をめぐらす。これに比べ第13図2は杯部の広がりが大きく後出的である。また、端部を肥厚させ肩平で大きく開く脚部外面に櫛描による鋸歯文・直線文で飾りたてる10は、杯部の深いものにつながると思える。

(上層) 第13・14図

壺類は受口状の口縁を有するもの(第13図11)、口縁部が外反し端部に沈線のめぐるもの(12)、肩が張らず長胴の体部からゆるやかに外反する口縁部にいたるもの(14)、細頸壺(13)がある。

壺類は形態にバラエティがある。まず、15は布留式の特徴を備えるもので口縁部内面の肥厚な突出気味であり、外面はカキ目風のハケ、内面はヘラケズリ調整である。第14図1・2はくの字状口縁甕で尖り気味の端部のものと平坦面をもつものがある。



第11圖 常楽寺遺跡下層出土土器(2)

日本海系の甕として3～5が上げられ、いずれも二重口縁を呈するものであるが、3は壺になるかもしれない。4・5は強いナアによりまっすぐ立ち上がる。また、6はいわゆる東海系の「S字状口縁」甕で端部の屈曲がシャープであり、外面に刺突列点文、肩部外面は粗いハケ、頸部内面にもハケが残る。7～9は受口状口縁甕であるが、7は典型的な形態を示し、肩部に波状文が施される。8・9は7にくらべ屈曲があまり、中・下層でも認められた形態である。

高杯は杯部口縁が外方へ直線にのびるもの(12・13)と欠山系のもの(10～12)とが主である。

須恵器

杯身(第9図4)、甕(5)、壺(6)がある。4の杯身は受部の引き出しが強く口縁部の立ち上がりも高くやや内傾し、端部には内傾面をもつ。6世紀前半ごろに位置づけられる。

5の甕は口縁部を欠くが、頸部はやや太く肩が若干張る。体部中央外面にカキ目が残る。

灰釉陶器

7は底部のみの破片で断面三角形に近い高台であるが、内面にわずかな稜をもつ。

土師器

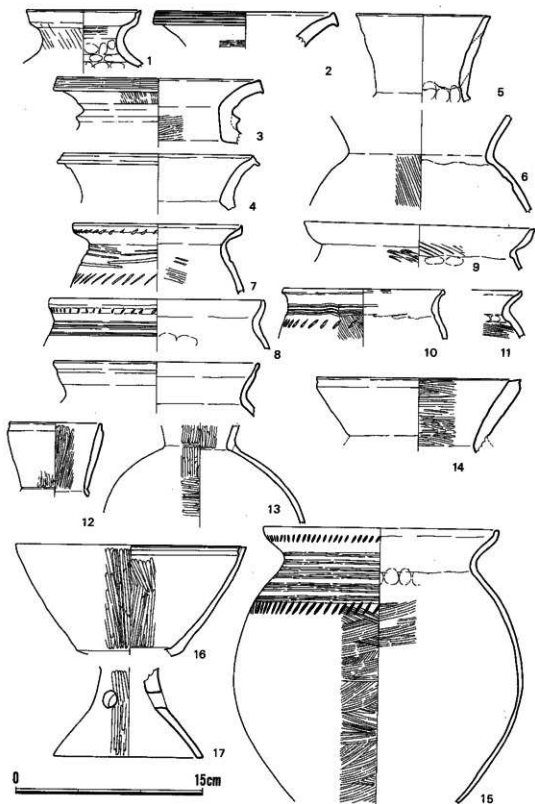
第9図8～13の小皿、14・15の中皿がある。8・9は端部が丸くおわるもの、10～12は強いナアにより口縁部外面に稜をなすものである。また、13は口縁部を外反させ端部を内側に肥厚させる。

14・15は口縁端部をつまみ出しておわるもので15の外面には1条の沈線がめぐる。

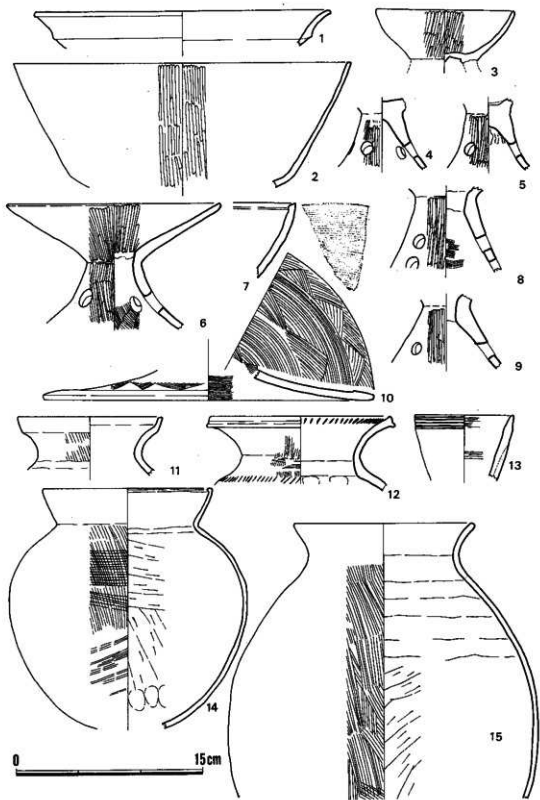
それぞれの土師の時間的な位置付けとしては11・13は11世紀代、10は12世紀代、9・12・15は12世紀後半～13世紀、8・14は13世紀代にあてられよう。(吉田)

註

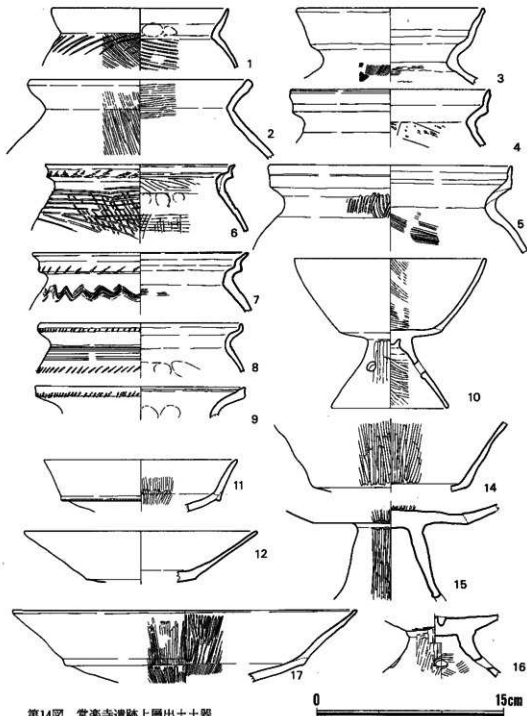
- (1) 佐原 真「第三節弥生時代」『彦根市史』上冊 1960年
- (2) 久永春男・芳賀陽「欠山遺跡」『瓜郷遺跡』豊橋市教育委員会 1963年
- (3) 「蕪池遺跡」・「尾張病院山中遺跡」『新編一宮市史 資料編二』1967年
- (4) 加藤安信監『朝日遺跡』愛知県教育委員会 1982年
- (5) 宮成良佐・佐野誠一「長浜市越前塚遺跡略報」『滋賀文化財だより』(財)滋賀県文化財保護協会 1983年
- (6) 中谷雅治監『鴨田遺跡』『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』II 滋賀県教育委員会 1973年



第12圖 常樂寺遺跡中層出土土器



第13図 常楽寺遺跡中層・下層出土土器



第14図 常楽寺遺跡上層出土土器

- (7) 宮成良佐「高田遺跡（長浜電報電話局敷地内所在）調査報告書」長浜市教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会 1980年
- (8) 寺沢 薫「大和におけるいわゆる第5様式土器の細別と二・三の問題」『奈良市六条山遺跡』奈良県文化財調査報告書 第34集 1980年
- (9) 『金沢市西念・南新保遺跡』金沢市教育委員会 1983年
- (10) 坂田郡近江町奥松戸遺跡，高島郡新旭町正伝寺南遺跡等。

4. 近江における弥生時代後期後葉の土器群——その再検討——

(1) 問題の所在

従来、近江における弥生土器研究は個別の土器を他地域の個々の土器と比較する方法で、他地域の編年の中で語ってきた。しかし型式・形式等の概念の濫用や一括資料のもつ性格の理解不足等から、他地域一特に畿内の土器群との並行関係において誤認も見うけられる。

ここでは近江の弥生時代後期から古墳時代直前までの土器群を4期（当分の間は4型式といっても許されるかもしれない）に分けて略述する中で、他地域との並行関係について触れ、土器に表れた近江の中での地域性についての予察を行う。

ただ紙数の関係上、編年表を1葉示し（第15図）、要点のみを述べることにし、詳しくは用意している別稿にて扱うことにする。

弥生時代後期後葉という概念は後述するように漸定的なものであるが、にもかかわらずこの時期の土器を取り上げたのは、昭和59年度に調査した本報告の大辰巳遺跡やすぐ隣のほ場整備事業に伴う永久寺遺跡⁽²⁾の出土遺物の主体をなすことが主たる理由である。更に近江ではそれ以前に比べ良好な資料は少いが出土相対量が多いこと等もそれに加わる。またそこで得られた結果が、古墳の出現あるいは創出についての理解を助けるであろうという見通しがあったにほかならない。

(2) 近江の弥生時代後期後葉の土器

(a) 時間的位置

弥生時代の後期の土器について定見を持ち得ないため、ここでは唐古遺跡第五様式第二亜式までを含めた唐古遺跡第五様式並行期⁽³⁾を弥生時代後期としておく。

またここで後期後葉とする時期は、ほぼ唐古遺跡第五様式第一亜式並行期からいわゆる庄内式並行期の直前までのことで、土器群の変化を説明するための便宜的なものにすぎない。あえて近江の弥生時代後期のこのころの土器群中に画期を求めようとすると、本書で言う1期と2期の間に求められ、それ以降が後期前葉・中葉・後葉と土器型式群をつらぬく諸要素のまとまりによって分ける際の後期後葉と呼称しうるものである。

後期中葉と後葉を分ける要素とは、畿内地方第V様式前半⁽⁵⁾を中心とし代表される、口縁が外反していく高杯（高杯形土器A₂）⁽⁶⁾が消失しつつあり、東海西部地方を中心と

する「欠山式」形高杯が出現してくること、やや小形化していく器台とその口縁の裝飾化、あるいは垂下、受口状口縁端部のつまみ出し傾向の出現等に求められる。

以下、便宜上漸定的な後期後葉を中心とした土器群を略述するにあたり、とり合えず1期～4期と仮称していくこととする。

(b) 1期

これまで受口状口縁と称してきた近江系壺形土器については、基本的に口縁端部の外方向へのつまみ出しのないものが中心となり、依然として口縁部外面に刺突文、胴部に沈線・刺突文を備え、胴部やや下位を突帯と櫛描波状文あるいは円弧文でこれを飾るものがある。

高杯は畿内地方と同様の口縁部が強く外反するものが中心となり、このころの後期の高杯の変化は比較的緩慢である。

器台は受部が直線的に伸びるものとゆるく外反するものが共存し、体部から裾部にかけてゆるく八字形に広がる。口縁部に裝飾等はもたない(13・14)。

(c) 2期

近江系壺の口縁端は外方にややつまみ出す傾向のものと、つまみ出さないものが共存し、このことは「庄内式」並行期の直前まで続く。この期の新相で北陸の「月影式」といわれる壺に特徴的な「疑凹線」を備えた壺が小形のもので出現し加わる。これは胴部内面の頸部下端からヘラで削っているが、近江の後期での内面ヘラ削りは北陸系以外の壺でも珍しいものではない。

高杯は前の期と同様の口縁が外反するものに、東海西部地方の「欠山式」に特徴的な高杯の古相のものが加わる。脚部が長く、坏部がさほど発達していない浅いものである(23)。これとは別にやや小形の碗状坏部をもつものも加わる(25)。

器台は直線的に伸びた受部から下はすぐに八字形に開くものになるが、口縁端を垂下あるいは肥厚し、浮文・刺突文・沈線文等の裝飾を加えるものが主流となる。

先述の「欠山式」形の高杯も一部では器台の機能を果していた例があり、この時期以降、高杯と器台の機能未分化の傾向がはじまり、「庄内式」並行期まで続く。その結果、畿内と他地域で器種呼称の混乱も呼ぶようになる。

(d) 3期

いわゆる二重口縁壺が出現し、器台が小形のものになる傾向がでる。

浮文や沈線文で飾られた二重口縁の壺に加え、口縁がゆるく外反する甕の端部が上方に尖がり気味に処理され、いわゆる庄内式甕もある。近江系甕の口縁端のつまみ出しは、湖南においては顕著なものも見られるが、湖北地方ではむしろ口縁受部から頸部にかけてのカーブがゆるく肩の張らない北近江系とでも呼ぶべき甕が主流をなす¹¹⁾(37)。この種の甕は北陸系甕との相互の影響の中で成立してきたものである。

更に北大津遺跡でこの時期顕著に現れる「甕B」(38)も、北陸・畿内と近江の3者相互の影響のもとで出現したもので、湖北南半・湖東では類例が少い。

湖北では「欠山式」形高坏の盛行期にあたり、坏部は深く発達し、口縁部内面に1条～数条の沈線文帯を備えたものに変化する。湖南でも「欠山式」形の高坏は盛行するが、加えて畿内の高坏形土器A₂の発達した高坏が認められる。

器台の資料は不足するが、小形化傾向が顕著である。

(e) 4期

「庄内式」直前のこの時期は、近江系甕を残して畿内的な様相が顕著になる。近江系甕の口縁端部は2期に外方つまみ出しの傾向が現れ、この時期までつまみ出さないものと共存し、この間の口縁部の変化も少い。

「欠山式」形高坏の坏部は発達し、脚部は外湾しつつあるものになり、「元屋敷式」形高坏との中間的形態をなす。また近江での小形器台のこれまでの確実な初現はこの時期である。

この次の段階が「庄内式」並行期の最古相期にあたり、近江では「元屋敷式」形の高坏と甕、「月影式」形の甕等を伴う。

(f) 最古の土師器

「庄内式」は、近江では3型式ほどからなる土器群がこれに並行すると認識され、第15図には古相の一群を示した。

この時期の近江の土器一特に甕などは世の中で前方後円墳を作りはじめているころとは思えないような土器である。

(3) 近江での土器の地域性

(a) 近江系の甕・器台および高坏

1976年まで「受口状口縁」をもつ甕を東海系の「S字状口縁」甕として、ないしはその亜式として研究者は扱ってきた。そして草津市片岡遺跡の報告によって近江で出¹²⁾

土する「S字状口縁」甕は近江独自のものであり、「受口状口縁」甕と称すべきである
とされ、一部誤解と誤認を含みながら今日に至っている。

しかるに、すでに1960年、佐原真によりこの弥生時代後期の「受口状口縁」をもつ
甕は近江独自の土器であり、加えて大辰巳遺跡で大量に出土した器台もこの地方独特
の器形であることが明らかにされている。もつともこの近江独自のものとした甕は、
後述する典型的な近江系甕とは異なるものであったが、この重要な指摘を今日まで全
く生かされていないところに近江の弥生土器研究がいかに沈滞したものであったが如
実にあらわれている。

「受口状口縁」をもつ甕が弥生時代後期に近江を中心に分布することは認められる
ところであるが、このころの山陽東部・山陰・北陸・東海などに特徴的な甕の口縁形
態も受口状を呈しているため、本書では近江系甕と称してきた。近江系甕とは、口縁
端に面をもつ受口状口縁外面に櫛状工具による刺突列点文を備え、胴部肩に櫛描沈線、
櫛状工具による刺突列点文、胴部中ほどから下半にかけて櫛描円弧文と刻目の施され
た1条の突帯をもつ甕をその典型とし、脚台はもたないものである（5など）。

この典型的な近江系甕の分布の中心は湖南地方—現在の野洲郡・守山市・草津市付
近の平野部に求められ、畿内地方—特に山城および大和・摂津などでも検出されてい
る近江系甕はこの典型的な湖南地方の近江系甕である。なお湖北・湖西では、垂流近
江系甕の分布地域となっており、湖北でもほぼ姉川以北にあたる湖北北半では第2章
中で述べたように、垂流近江系甕よりさらに離れたものとなった北近江系とでも言う
べき甕の分布地域となっており、湖西の一部もそれに含まれる。

佐原真の指摘した近江系の器台とは、ほぼ唐古遺跡第五様式第一垂式並行期ごろ、
あるいはその直前にあらわれるものを言い、ゆるく外反するか直線的な受部からゆる
くハの字形に広がりながら裾部に至り、口縁に裝飾をもたない中形品で3個の円孔を
備えたものである（13・14など）。

またここで言う近江系の高坏とは、畿内地方や東海地方西部において後期中葉以降
見られる口縁が外反するもので、畿内では高坏形土器A₂と呼ぶものと変らないが、上
記の近江系器台とほぼ同時期に盛行しながらも、その後湖南地方の一部を除いて畿内
的な変化は示さないものを指し、「欠山式」形高坏にとって変わられつつあるものであ
る（10・11など）。

この近江系器台と近江的な高坏の変化は、湖北や湖西を中心に見られるものである。

(b) 他地域系の土器群

これまで遺跡ごとの他地域系と近江系土器との比率による分析は少し行なわれてき

た。しかるに北大津遺跡での甕Bの評価に表われているように必ずしも一系と断言⁽¹⁾切れない二地域以上の折衷的な土器もあり、そうした分析が成功しているとは言いがたい。例えば、く字形に外反する口縁をもつ甕は畿内系として扱われる傾向にあるが、唐川遺跡Ⅱ区T6・7包含層出土資料のそれは全て北陸系の甕と同じ胎土であり、北近江系甕や東海地方からの搬入品とは明らかに異なるものである。また他地域系の形態を呈しながらも、確実に他地域からの搬入品と思われるものは思いのほか少ないのである。

将来的には胎土の細かな分析と比較、出土資料全ての数的処理、更なる地域性の追求と規定等をふまえるべきであろうが、ここでは地域性を示す典型的な形式の分布とその大まかな頻度をもとに概観しておく。

近江系甕の中心は湖南地方であるにもかかわらず畿内的な様相も濃い。近江系の器台と高坏の変化は湖北を中心に湖西も含みうるが確実な東海地方からの搬入品も米原以北の湖北に多く、逆に東海地方西部に影響を与えた近江とはこの地域であると言える。また湖北でも姉川以北は湖西の一部を含んで北近江系甕の分布の中心となり、北陸的な様相が顕著である。湖西は北陸・畿内および湖北を通じてもたらされた東海の影響、それに近江系の四者が混在する形をとる。近江の中でも特異な様相を呈する地域の遺跡であることが認められる北大津遺跡は、湖西と呼ぶ地域の南端に位置するので、甕B(38)とされたものは湖西の状況を如実に示す形式であろう。こうした折衷的な形式は近江のみならず各地にあり、例えば近江以外で出土した「近江系」あるいは「近江型」・「近江形」と報じられている土器の多くは近江系とは認められないものがある。

弥生時代後期における近江は、資料の少い湖東を留保しても、草津・守山・野洲を中心とした湖南(及び湖東?)、大津北半を含む湖西、湖北北半、湖北南半の4つの地域性が認められ、これらはそれぞれ近江以外の地域の影響を受けているが、他地域の土器分布圏に含まれるものとはみなし難く、搬入品の少なさがそれを補強するのである。(用田)

註

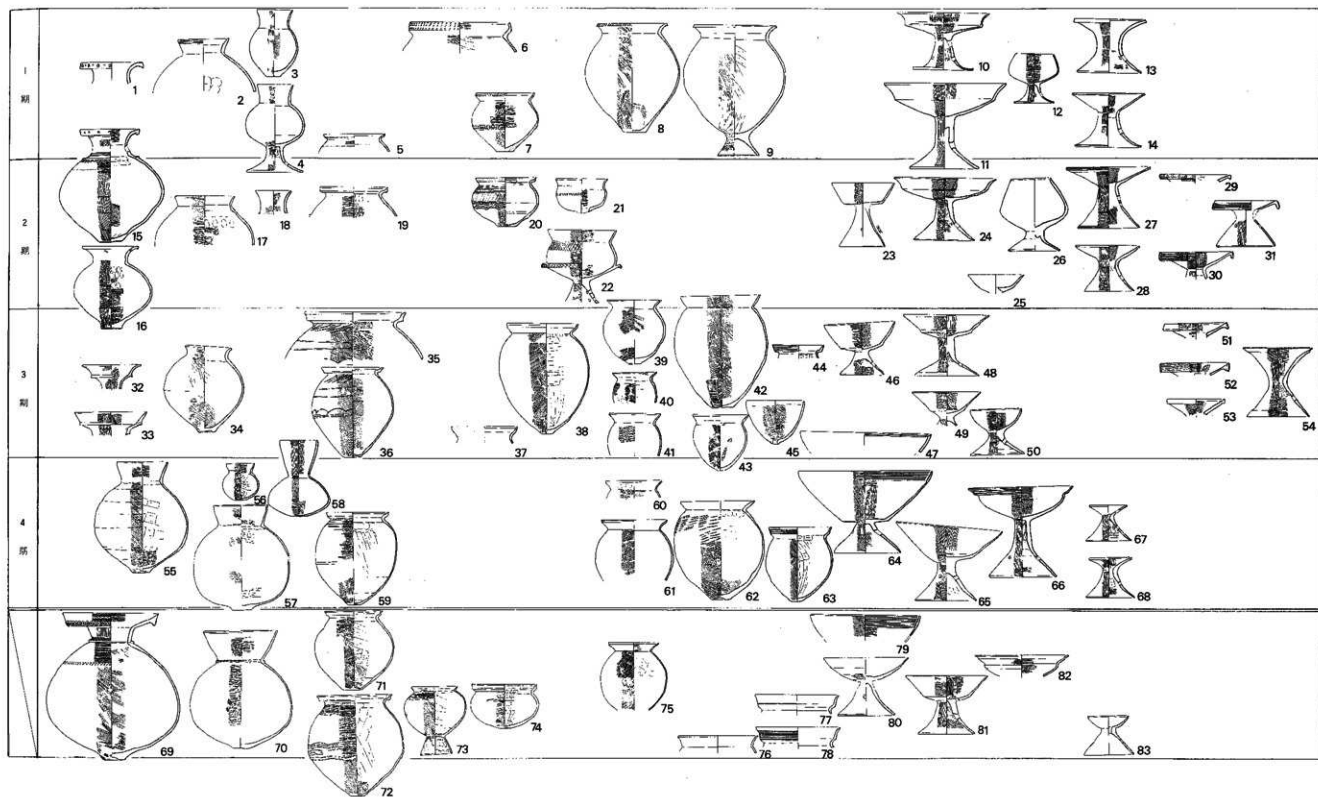
- (1) 田中稔の理解(「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ』1 1978年 12~23頁)が参考になり、筆者の考えに近い。
- (2) 用田政晴・吉田秀則「長浜市永久寺遺跡」『発掘整備関係遺跡発掘調査報告書』XII 7 1985年
- (3) 小林行雄「土器類」『大和唐古弥生式遺跡研究』(『京都帝国大学考古学研究所報告』第

16冊 1943年

- (4) 田中琢「布留式以前」『考古学研究』12-2 1965年 10～17頁で示された土器群が中心をなす型式群をいう。
- (5) 佐原真「畿内地方」『弥生式土器集成 本編』2 1965年
- (6) 註(5)に同じ。
- (7) 以下「」を付したものは一型式として設定しうるものではなく、いわゆるという意味を超えるものではない。また「形」とは、搬入品に加え近江産のものを含んでの単に形態だけのものである。
- (8) 厳密には南近江系と称した方が現実在即している。その理由については本文中後半にて少し触れている。また「系」については、藤田憲司（「中部瀬戸内地方の非在地形土器」『埋蔵文化財研究会第15回研究集会発表要旨』1984年）の考えに近い。
- (9) これ以前でも小型甕（従来、扁平壺とか鉢の形式としていたもの）等の口縁ではつまみ出し傾向のみられるものがある。
- (10) これ以前でも後期を通じて北陸系の甕は近江各地で見られ、北陸系の初現という意味とは異なる。
- (11) この種の甕については、以前若干触れたことがある（用田政晴「唐川遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』IX-1 1982年）。
- (12) 北近江系甕の北陸地方での出土例紹介と考察が行なわれたことがある（吉田秀則「結語」『北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告書 IX-1 伊香郡余呉町坂口遺跡一』1984年 16～17頁）。
- (13) 丸山竜平ほか「草津市片岡遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書』III～II 1976年
- (14) 佐原真「先史時代」『彦根市史』第2編上代 1960年 107頁
- (15) 中西常雄「大津市北郊地域における画期的状況」『北大津の変貌—弥生時代から古墳時代へ—』1979年
高成良佐「湖北地方における初期土師器の様相」『高田遺跡（長浜電報電話局敷地内所在）調査報告書』1980年など。

第15図 出土遺跡

1.3.4.5.6.11.13 南市東遺跡 2.8.9.14 大東遺跡 7.15.17.19.20.24.26.28.30.
椋木原遺跡 21.23.31.52.57.76.77.78.80 唐川遺跡 16.27 大伴遺跡 18.25.
29 横江・大門遺跡 22.32.33.39.41.49.50 五之里遺跡 40.44.51 片岡遺跡
10.34.35.36.38.42.43.45.46.70.72.74.81.82 北大津遺跡 37.47 円通寺遺跡
71.73.79 高田遺跡 55.56.60.62 高木遺跡 58.61.63.64.66 正伝寺南遺跡
53.59.62.65.68 下々塚遺跡 75 滋賀里遺跡 12.83 稲部遺跡



第15図 近江における弥生後期後葉を中心とした土器群



I 区 T 2



II 区 T 6



Ⅲ区T 1—B



Ⅲ区T 3



常楽寺遺跡（南から）



常楽寺遺跡南半（北から）



常楽寺遺跡東壁基本層序



常楽寺遺跡南端落ち込み



I区T1土器出土狀況



I区T2土器出土狀況



III区T1-B土器出土狀況



III区T2土器出土狀況



III区T3土器出土狀況



I区T1調査風景

昭和60年3月

県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書II-3

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 真陽社